

あて先をなくした手紙のゆくえ

作・今井一隆

## #1 『穴』

登場人物

男1

男2

女

郵便配達員(男)※

## #2 『あまやどり』

登場人物

田中(男)

小島(男)

順子(女)

雨宿りの女

## #3 『柘榴』

登場人物

兄※

妹

弟

※ 「郵便配達員」と「兄」は同一の男優により演じられる。

## #1 『穴』

◎

どこかの空き地のような場所。

男1が、しゃがんで「穴」を覗き込んでいる。

そこへ郵便配達員が通りかかる。

片手に地図、片手に手紙を持って――

郵便

(地図に目を落としながら、ぶつぶつと) 六丁目、六丁目……おおっ！

郵便配達員、あやうく足を踏み外し、「穴」に落ちそうになる。

郵便

あのう……。

男1

(穴を覗き込んだまま) ……。

郵便

どうかしました？

男1

(顔を上げ) ……。

そして静かに両手を合わせる。

郵便

……え？ もしかして、誰か落ちたんですか？！

男1

あなたですか？

郵便

？

男1

あなたが、落としたんですか？

郵便

はい？

男1

どうして、そんなことしたんですか！？

郵便

あ……いやいや、僕じゃ、ありませんよ。だって、僕は今日、はじめて、こ

男1

こに来たんですから。

郵便

はじめて？

男1

ええ。

郵便

だから？

男1

え？

郵便

だから、何だって言うんです？

男1

いや、だから……。

郵便

はじめてだから、許されるとでも？

男1

許されるとか、許されないとか、そういう話じゃ……。

郵便

そんな理由で許されるわけがないでしょう！？

男1

ちよ、ちよっと待ってください。妙な言いがかりをつけるのはよしてください。

郵便

い。

男1 言いがかり?! あなた、今、「言いがかり」って言いましたね?  
郵便 ・・・。  
男1 いつ、わたしが言いがかりなんかつけました?  
郵便 現に、こうして、つけてるじゃないですか……。  
男1 聞いたんですよ、わたしは。「あなたが落としたんですか?」って。質問したんですよ。  
郵便 ていうか、いったい誰が落ちたんですか?  
男1 論点をすり替えるな!

そこへ女がお盆に茶器を載せて現れる。

女 どうしました? 大きな声を出して。  
男1 この人が、わたしに言いがかりをつけてくるんだよ。  
女 言いがかりを?  
郵便 いや、べつに、僕は……。  
女 どんな?  
男1 わたしが、この人に言いがかりをつけたって。  
女 まあ! (郵便に) 何なの? あなた。ここいらじゃ見かけない顔だけど。  
郵便 僕は、郵便配達員です。今日から、この地域を担当することになったんです。  
女 郵便屋さん?  
郵便 はい。  
女 郵便屋なら、言いがかりなんかつけてないで、郵便を配達すればいいのに。  
郵便 いや、ですから、言いがかりなんかつけてませんし、今も配達途中なんです。けど、いかんせん不慣れな土地だもんで道に迷ってしまつて……あ、そうそう。六丁目の田中さんのお宅は、この辺りでは……?  
女 (穴に向かって) 田中さん、郵便ですよー!  
郵便 ええっ!?  
女 聞こえてるのかしら?  
郵便 聞こえてるのかしら?  
男1 困るよ。聞こえてたら、返事くらいしてくれないと。  
女 ええ。  
男1 まったく、これだから最近の若い人は……。  
郵便 ……。  
女 (郵便に) あなたは?  
郵便 はい?  
女 おいくつ?  
郵便 何がですか?  
女 年よ。年齢。  
郵便 ああ。今年、ちょうど30になります。  
女 じゃ、田中さんよりひとつ上じゃない。  
郵便 あ、そうなんですか?

男1 とぼけて。(真似て)「あ、そうなんですか」だって……。

郵便 (ムツとして) だって、僕がそんなこと知るわけないじゃないですか。

女 そういう言い方ってあんまりじゃない？ 田中さんに失礼よ。

郵便 え？

女 そりゃあ、あなたみたいなエリートにとっては、田中さんの年齢なんて、取るに足らない問題なのかもしれないけれど。

郵便 あ、いや、べつに僕、エリートでもないし、だいたいそういうこと言ってるんじゃないくて……。

男1 そんなことより、お茶の用意、できたのか？

女 はい。よかったら、郵便屋さんも、ご一緒に、いかが？

郵便 え？

女 紅茶。アールグレイ。

郵便 ああ、いえ、結構です。

女 コーヒーの方が良かった？

郵便 まだ配達途中なんで……。

男1 それは「批判」と受け止めるべきなのかな？

郵便 ヒハン？

男1 わたしたち夫婦はお茶を飲む。しかし、あなたは飲まないという。お茶なんか飲んでる場合じゃないんだ、と……。

郵便 だから、そんなこと言ってないじゃないですか。

女 親切で、お茶を勧めただけなのに、なんであたし初対面の郵便屋風情に批判なんかされなきゃならないの？！(涙ぐむ)

男1 (女の頭を撫でる) あー、よしよし、かわいそうに、かわいそうに……。

郵便 批判なんかしてませんし、僕のことはお構いなく、どうぞ、お茶でも何でも、してください。僕はこの手紙を田中さんに届けなきゃならないんです。

男1 自業自得じゃないか。穴に落としたりするから。

女 まあ、あなただったの！？

郵便 いやいや、だから、違いますって！

男1 じゃ、誰だっというんだね？

郵便 そんなこと言われましても……。

女 あら？

女、郵便の手紙に目をとめる。

女 それ……。

郵便 え？

女 ちよつと貸して！(と、手紙をひったくる)

郵便 あ……。

男1 (男1に) あなた。この手紙。差出人が、あなたの名前になってる！

男1 わたしの？

女 ほら、見て。ここ。

男1 (手紙を受け取り) ……ほんとだ。

女 (郵便に) どういうこと?!

郵便 どういうことって……ご主人が出した手紙ってことじゃないですか？

女 うちの主人が？

郵便 ええ。

男1 (男1に) 筆無精のあなたが手紙を書くなんて、よつぼどのことよ？  
そうだな……。

と言いながら、男1、手紙を開封する。

郵便 あ、ちよつとちよつと！

郵便、男1から封筒を奪い返す。

郵便 何やってんですか、ひとの手紙を勝手に！

男1 批判ですか？

郵便 そうです、今度は、批判です！ ……あー、もう、こんな、くしゃくしゃにしちゃって……。

女 いいじゃない。だって、もともと、主人の手紙なんでしょう？  
え？

郵便 あなた、さつき、そう言ったじゃない。この人が出した手紙だって。

女 ……言ったかもしれないけど……。

郵便 言ったよ、言った！ 言い逃れできないぞ！

郵便 ええ、ええ、確かに言いましたよ！ でも一旦、出した以上、すでに半分は田中さんの手紙でもあるんですから……。

女 じゃあ、あなた、半分だけ読ませていただいたら？

男1 うん。(と、手を伸ばす)

郵便 ダメですッ！

女 どうして？

男1 何か読まれて困るようなことでも書いてあるのか？

郵便 知りませんよ！ 自分の胸に手を当てて、よく考えてみたらどうです。

男1 (胸に手を当て) ……。

女 どう？

男1 確かに、あんな書き方すべきじゃなかった。

女 後悔してるの？

男1 うん。だから直接、田中さんのところへ訪ねて行って、頭を下げたんだ。どうかこのことは忘れてもらえませんか？

女 それで田中さんは何て？

男1 「そんなこと言われても困ります」って……。

女 意固地な人。

郵便 いやいや、それは、そうでしょう。

女 あなた、田中さんの肩を持つのか？！

郵便 べつに肩なんか持ちませんけど、だって忘れるも何も、そもそも田中さん、この手紙を読んでないわけだから。

女 あなた、何を言ってるの？

郵便 だって、そうでしょう？ 手紙は、まだここにあるわけで……。

女 それを届けるのが、あなたの仕事でしょう？

郵便 ええ？ ええ、そうですよ。ですから……。

男1 まさに、そこなんだよ！ だからあなたにはどうしても、この手紙を田中さんに届けてもらわなくちゃならないんだ。わたしだって困るんだよ。あんなこと、一刻も早く忘れてもらわないと……。

郵便 いや、ちよつと待ってくださいよ。一旦整理しますよ？ いいですか？ ご主人の書いた手紙は、ここにあるんだから、田中さんはまだ……。

そこへ男2、スタスタと現れる。

郵便 ……。

男2、穴の縁にしゃがみ込む。

男2 (穴の底に向かって) 田中さーん。今月、家賃、振り込まれてないみたいなんですけどねー。いるんでしょう？ 田中さーん。いるのはわかってるんですよー。返事くらいしてくださいよー。

むろん、返事は、ない。

郵便 あのう、こういうこと、今さら言いだすのも、あれなんですけど……実際にどなたか、ご覧になったんですか？

え？

郵便 田中さんて、ほんとにその穴に落ちていらっしやるんですか？

女 だって、あなたが落としたんでしょう？

郵便 だから、僕は、してませんでば！

男2 失礼ですが、あなたは？

郵便 僕は、郵便配達員です。今日からこの辺りを担当することになったんです。

男2 田中さんとは、どういうご関係で？

郵便 いや、べつに関係は、何もないんですけど……。

男1 ないこと、ないだろ。手紙の宛先は田中さんなんだから。何、言ってるんだ？ 無責任な。

郵便 ……ええ、まあ、その意味では、確かに。手紙を届ける人間と、届けられる

人間、という関係です。

男2 では、仮に田中さんが穴に落ちていないとしたら、その「届けられる人間」は、今、どこにいるんです？

郵便 いや、それは……。

男2 居場所もわからないで、どうやって手紙を届けるんです？

郵便 ……。

男1 ひどいお役所仕事だな！

男2 まあまあ。確かにこの人の言うように、田中さんは穴に落ちてないかも知れない。なるほど、その可能性はゼロではない。しかしそのようにすべての前提を疑いだしたら、この世界は、どうなります？

郵便 え？

男2 たとえば真夏の海水浴場で、突然、雪に降られないとも限らない。浜辺にコートを着ていきますか？ たとえば朝、顔を洗うために掌にすくった水で、溺死しないとも言い切れない。浮き輪をつけて顔を洗いますか？

郵便 いや、それは……。

男2 たとえば店子は家賃を払ってくれないかも知れない。そんなふうにいちいち疑い出したら、大家は疑心暗鬼で、誰にも家を貸すことができなくなってしまうって、商売あがったりですよ。

郵便 でも現に、田中さんは家賃を滞納してるわけでしょう？ ていうか、まさに田中さんが家賃滞納してる、その家のありかを、僕は知りたいんです。そこに手紙を届けなきゃならないんです。どこにあるんですか？ 六丁目の田中さん家は。教えてくださいよ。

男2 やだ。

郵便 は？ あなた、田中さんの大家さんでしょう？

男2 大家に、そんな義務はありませんよ。

郵便 ……。わかりました。だったらこうしていても時間の無駄だ。もう結構。自力で探しますから。(行こうとする)  
女 待って！

郵便 (立ち止まり) ……何です？

女 大家さんも、お茶、お飲みになるでしょう？  
男2 ええ。もちろん。

女、お茶の用意をする。

男1 ま、そう、カリカリしなさんなって。(と、郵便屋の肩を叩く)

郵便 べつに、カリカリなんか……。ただ僕は、もっところ、なんていうか……合理的に話を進めたいだけなんです。

男1 うん、わかる、わかる。

郵便 ほんとにわかってます？

男1 じゃ、こうしよう。(ひそひそと) あれが、田中さんを穴に落としたってこと



郵便 男1 だ、手、打ってもらえない？  
 郵便 男1 あれって？  
 郵便 男1 だから、うちの女房。  
 郵便 男2 え？ いやいや、それ、おかしいでしょう。  
 郵便 男1 そうだよ。君の奥さんが落とすなら、田中さんよりむしろ、佐藤さんだ。  
 郵便 男2 そうですか？  
 郵便 男1 そりゃそうだよ。  
 郵便 女 お待たせ。  
 郵便 男1 どう、って……。  
 郵便 女 (咳払い) おまえ、ちよっと。  
 郵便 男1 はい。  
 郵便 女 そこ、座りなさい。  
 郵便 男1 なんです？ 改まって。  
 郵便 男1 いいから。  
 郵便 女 はい……。 (座る)  
 郵便 男1 おまえ、佐藤さんを穴に落としたことになったから。  
 郵便 女 え、どういうことですか？  
 郵便 男1 だから、落としたんだよ、佐藤さんを、この穴に。  
 郵便 女 誰がです？  
 郵便 男1 おまえがだよ。  
 郵便 女 あたしが？  
 郵便 男1 さっきから、そう言ってるじゃないか。  
 郵便 女 でも、どうして、あたしが、佐藤さんを……？  
 郵便 男2 奥さん、考えてもみてくださいよ。奥さんが田中さんを落とす動機がないで  
 郵便 女 しょう？  
 郵便 女 まあ、そりゃあ……。  
 郵便 男2 だったら佐藤さんでしょう？ 消去法で。  
 郵便 女 消去法ですか？  
 郵便 男1 消去法だよ。  
 郵便 女 なんだ。それならそうと、言つて下さらないと……。  
 郵便 男1 あのう、ちよっと、すいません。  
 郵便 男1 何？  
 郵便 男1 その、「佐藤さん」というのは、どこの佐藤さんのことでしょうか？  
 郵便 男1 隣の佐藤さんだよ。決まってるじゃないか？  
 郵便 男1 はあ。  
 郵便 男1 それが、何？  
 郵便 男1 僕も、隣の佐藤なもので……。  
 郵便 男1 なんだ、君がそうだったのか！

郵便 女 いや、でも僕は現に、ここに、こうして、いるわけだから……。  
落とされるようなこと、したの？  
郵便 男2 まさか！ 僕は何もしませんよ。  
往々にして、そういうもんですよ。  
郵便 男2 え？  
やった方はすぐに忘れてしまうけど、やられた方は一生忘れない。  
……。  
郵便 女 自分の胸に手を当てて、よく考えてご覧なさい。  
（胸に手を当てる）……。  
郵便 女 どう？  
郵便 男1 ひよつとして、あれかな……？  
何？  
郵便 男1 いや、でも……。  
この際、洗いざらい白状してしまいなさい。全部聞いてあげるから。  
ほら。せつかく大家さんもおっしゃってくださってるんだから。  
……。実は、ここへ来る途中、若い女性に道を尋ねられたんです。  
郵便 男1 どんな？  
え？  
郵便 男1 一口に若い女性と言ったって、いろいろあるだろう？  
ああ。  
郵便 男1 髪は？ 長い、短い？  
郵便 男1 髪は……。  
ちよつと待って！ メモするから。（と、手帳を取り出す）  
……。  
郵便 男2 はい。どうぞ、続けて。  
郵便 女 髪は、肩の、ちよつとこのあたりまで伸びてまして……。  
年は？  
郵便 女 そうですね、ぱつと見、二十歳くらいでしょうか。  
郵便 女 それじゃあ、女性と言うより、まだ少女ね。  
郵便 男1 いやいや、二十歳で「少女」はないだろう？  
郵便 女 そう？  
郵便 男1 そりゃそうだよ。だって、もう成人じゃないか。酒も飲めば煙草も吸える。  
郵便 女 煙草を吸ってたの？ その人。  
郵便 女 いえ……。  
郵便 女 ほらあ！  
郵便 男1 じゃ、いいよ、「少女」で。  
郵便 男2 どうぞ。続けて。  
郵便 男2 えつと、あと何を……？  
郵便 男2 その人となりがわかる情報を。  
郵便 男2 それは、たとえば……？

男2 血液型は？  
郵便 いや、それは……。  
男2 じゃ、靴のサイズは？  
郵便 ……。  
男1 おいおい、大家さん、からかってんのか？！  
郵便 いえ、そんなつもりは……。  
男2 まあまあ、いいでしょう。で、あなたは、その少女に、何をしでかしたんです？  
郵便 駅の場所を教えてやったんです。ここをまっすぐ行って二つ目の信号を右、と。彼女は、ありがたうと言って、教えられたとおりに歩いて行きました。ですが、さっきも言いましたけど、僕は今日からこの辺りの担当になったばかりで、ほんとは三つ目の信号を左だったと、後になってわかったんです。……。  
一同 お茶にしません？ せつかくの紅茶が冷めてしまうわ。  
男1 そうだね。

女、紅茶を入れる。

女 大家さん、お砂糖、おいくつ？  
男2 じゃ、ひとつ。  
女 あなたは、二つでいいのよね？  
男1 うん。  
女 郵便屋さんは？ ひとつ？ 二つ？  
男1 三つ、入れたげなさい。最後の一杯なんだから。  
郵便 え？  
女 じゃ、三つ。  
郵便 ちよ、ちよっと待って下さい！ 何ですか「最後の一杯」って？  
男1 そこ、こだわるとこじゃないだろう？  
郵便 いやいや、絶対、こだわるところでしょう！？  
男2 「絶対」なんてことは、この世に何一つ、ありやしないんですよ。いつか訪れる「死」を除いてね。  
郵便 ……。

女、紅茶を運ぶ。

女 (男2に) どうぞ。(と、カップを)  
男2 (受け取り) ありがとう。  
女 (男1に) はい、あなた。  
男1 ん。  
女 (郵便屋に) 熱いから、気をつけて。(と、カップを)

郵便 (受け取り) ……どうも……。

一同の手にティーカップ。

郵便配達員、紅茶を口に運ぶ。

男1、女、男2、それを見つめている。

郵便 (手を止め) ……皆さん、召し上がらないんですか？

男1 いいよいいよ。

郵便 え？

男2 気にしないで。

女 どうぞ。遠慮なさらず。

郵便 いや、でも……。

男2 あとのことは、こっちでやっつく。何も心配いらなから。

郵便 あとのこと？

女 さあ。どうぞ。冷めないうちに。

男1、女、男2、郵便配達員を凝視している。

郵便 ……。

郵便配達員、カップを置く。

と、それが合図でもあるかのように、残りの三人が一斉に自分のカップを口に運ぶ。

郵便 ……。

暗転。

闇の中、紅茶をすすする音。

## #2 『あまやどり』

◎

1990年代、東京の下町。

晩秋。

事務机で若い女が電卓を叩いている。

アルバイトの大学生、順子である。

机の傍らに簡素な応接セット。

机の上の電話が鳴る。

順子

(出て) はい。平井興業……あ、おはようございます。いえ、まだ現場の方だと思えますけど。はい。名刺ですか？ ブルーのホルダー……。ちよつとお持ち下さい。(探して) ブルー、ブルー……。あ。あった。(と、名刺ホルダーを手に取る) もしもし、はい、ありました。……ムラタ、ですか？ ムラタ……あ、村田税理士事務所ですか？ はい。よろしいですか？ 03の……。

順子、電話番号を読み上げる。

そこへ、作業服姿の田中、少し遅れてバイトの小島が、缶コーヒーを手に現れる。

小島

(財布を手に) いや、いつもいつも、悪いっすよ。

田中

いいっていいって。

小島

……そうですか？ じゃあ、すいません。ごちそうさまです。(財布をしまう)

順子

あ、お疲れさまです。(電話に) 小島さん、お戻りになりましたけど……そう

ですか。はい、伝えておきます。はい。(電話を切る)

田中

誰？

順子

社長です。これから税理士の先生と打合せで、今日は会社に戻らないそうです。

田中

そう。

順子

あ、田中さん、これ、お借りしました。(と、名刺ホルダーを)

田中

うん。あ、順子ちゃんも、よかったら、これ。(と、コーヒーを)

順子

あ、すいません。いただきます。(受け取り) あー、あったかい。

田中

で、どう？ 大学は。大丈夫？

順子

はい？

田中

坂下さん、あれしてから、ほとんど毎日来てもらってるからさあ。卒論、終

順子

わった？

順子

ああ、ええ、まあ、なんとか……。

田中 そう。じゃあ悪いんだけど、今度の日曜、また電話番号お願いできるかな？  
順子 え？ またですかあ？ 今月もう三回目ですよ？

田中 小島君、コーヒー美味いなあ。

小島 え？ ああ、ええ……。

順子 ……またそうやってはぐらかす……。で、坂下さんの具合、どうでした？

田中 うん、順調順調。あ、見る？

順子・小島？

田中 (胸ポケットから数枚の写真を取り出す) ほら、ね？ ふくふく太ってるだ  
ろう？ 先週見舞いに行ったときは、もっと顎の辺りがげっそりしてた。

順子 また写真なんか撮って。坂下さん、いやがりません？

田中 最初はいやがってたけど、でもこの頃は写る気満々で、化粧して待ってた  
よ。まあ、この調子なら、来週くらいには退院できるんじゃないかな。

順子 よかった。はい。(と、小島と写真を回覧する)

田中 ほんとは胃潰瘍なんてさ、今どき、薬で治るんだよ。なのに我慢しすぎちゃ  
ったんだな。

小島 何をそんなに我慢してたんですかね。

田中 だから胃潰瘍だってば。

小島 いや、そもそも胃潰瘍になっちゃうくらいの、何かストレスがあったわけで  
しょ？

順子 ストレスからくるあれとは限らないでしょ？

小島 でも、坂下さん、酒も煙草もやらないし……。

順子 コーヒーはよく飲んでたじゃない。濃いやつ、好きでしょ。

小島 そうだけど……。

順子 田中さんも気をつけて下さいよ。

田中 俺は平気だよ。あ、小島君、今月の交通費の精算、まだだったよね？

小島 あ、はい。

田中 (順子に) 用意できてる？

順子 はい。

順子、机へ移動。

続いて小島も。

順子 ここ、ハンコもらえる？

小島 あ……今日、持ってきてないや。

順子 え……。

田中 サインでいいよ、サインで。

順子 じゃ、サインで。

小島 うん。(用紙にサインする)

ぼつぼつ雨の音。

田中 あ。とうとう降ってきやがったな……。  
小島 ああ……。

田中 あ、小島君、セメントどうしてたつけ？  
小島 トラックの荷台にブルーシートかけときました。  
田中 そう。……あ！俺、タイガーボード出しっ放しだ！  
小島 え！

田中 ちよつと行ってくるわ。  
小島 俺もいきますよ。  
田中 いい、いい。そんな枚数ないから。

田中、去る。

小島 ……。これ。(と、サインした紙を)  
順子 ああ、はい。(受け取り) じゃあ。(と、交通費を)  
小島 どうも。

小島、ソファに戻る。

順子 ……ねえ、小島君……。  
小島 ん？  
順子 ……あ、ううん。タイガーボードって？  
小島 耐火材だよ。壁の裏とか天井とかに使う。  
順子 へえ。タイガーって、そういう意味もあるんだ……。  
小島 え？ や、ないでしょ。ただの商品名だよ。  
順子 ああ。商品名……。  
小島 飲まないの？  
順子 あ、うん。飲む。(蓋を開ける)

雨の音。

小島 じつとしてると、結構冷えるね。  
順子 そうね。  
小島 卒論、終わったんだ？  
順子 うん、一応。小島君は？  
小島 俺は……来年、がんばる。  
順子 え？  
小島 今年は、もう諦めた。  
順子 ……。留年、てこと？  
小島 まあね。

順子 そうなんだ……。

小島 (コーヒーを飲む)

順子 ……実は、こないだ、電話しちゃったんだ。小島君のところ。

小島 え？

順子 日曜日、電話番号してるとき。

小島 なんて？

順子 来月の出勤予定、確認しようと思って。

小島 ああ。

順子 女の人が出た。

小島 ……。

順子 驚いちゃった。だって小島君、ひとり暮らしだって聞いてたから。……大学

の人の？

小島 ん……。

順子 もしかして、あたし、知ってる？

小島 ……。

順子 あ、関係ないよね。ごめん。何言ってるんだろ、あたし。あ、そうそう、借り

てたノート、今日、持ってきた。ごめんね、長いこと。

小島 あ、いや……。

順子 どうもありがとう。助かった。(渡す)

小島 うん……。

順子 でも、そっか。留年しちゃうんだ。

小島 ……。田中さん、遅いなあ。

順子 ……。

と、ドアをノックする音。

声 速達です。

順子 あ、はあい。

順子、去る。

ややあつて、田中、戻ってくる。

田中 ふう、危ねえ、危ねえ。

小島 大丈夫でした？

田中 ギリギリセーフ。あれ、濡らしたら大損害だからな。……あれ？ 順子ちゃ

んは？

小島 あ、今、ちよつと速達……。

順子、封書を手に戻ってくる。



順子 田中さん、これ。(と、手紙を)  
田中 え？ (受け取り) 俺に？  
順子 あんまり飲み過ぎないで下さいよ。  
田中 (差出人を見て) ああ……。  
順子 あ、もうこんな時間。小島君、お昼は？  
小島 いいよ、順子ちゃん、先に。  
順子 そ？ じゃ、ちよつとコンビニ行ってくる。田中さん、あたし、向かいのコンビニ行つてきますけど……。  
田中 (手紙を読んでいる) ……。  
順子 田中さん？  
田中 (手紙から顔を上げ) 俺、先月こんなに呑んだかなあ？  
順子 え？  
田中 ちよつと盛つてない？  
順子 あたしに聞かれても知りませんよ。で、どうします？  
田中 何？  
順子 コンビニ行つてきますけど。何か、買つてきます？  
田中 ああ。カップ麺でいいや。ペヤングかなんか。  
順子 ペヤングですね。小島君は？  
小島 いや、いい。俺、弁当あるから。  
順子 ……そう……。じゃ、ちよつと行つてきます。  
田中 いってらっしゃい。

順子、去る。

田中 これ、会社の経費で落とせないだろうか。  
小島 坂下さんに殺されますよ。  
田中 だよな。あーあ、こんなの女房に見られたら、えらいこつた。隠しちゃえ。  
小島 (手紙を机にしまう)  
田中 スナックなんか行かないで、家で呑んだらいいじゃないですか。  
小島 それじゃ呑む意味ないじゃん。  
田中 酒に変わりはないでしょう？  
小島 大ありだよ。小島君わかつてねえなあ。  
田中 え？  
小島 酒つてのは、お酌する人によつて味が変わる、ミラクルなドリンクなの。  
田中 そりゃ、わかりますけど。でも、好きで奥さんと一緒になつたんでしょう？  
小島 それとこれとは話が別。  
田中 そういうもんですかねえ。  
小島 小島君も結婚してみりゃわかるよ。  
田中 田中さんは奥さんとどこで知り合つたんですか？  
小島 同級生だよ。高校の。

小島　じゃあ、もう長いんですね。

田中　そうですね。出会ってかれこれ20年か。結婚したのは最近だけだね。

小島　それは、どういう心境の変化で？

田中　心境の変化？

小島　何か、キツカケとか、決め手になるようなことが、あったわけでしょ？

田中　まあ……強いて言えば、ハズミかな。

小島　ハズミ？

田中　意外とそんなもんだよ。

小島　そうですか……。

田中　（外に目をやり）あれ……？

田中、ふらりと去る。

小島　？

田中の声　よかったら、どうぞ、中へ。

女の声　いえ、でも……。

田中の声　風邪でもひいたら、たいへんだから。遠慮しないで。

女の声　……じゃあ……。

田中、若い女を連れて戻ってくる。

田中　どうぞ。（と、椅子を勧める）

女　どうも……。

田中　なんか、飲みます？　コーヒーか、なんか。

女　いえ。おかまいなく。

田中　小島君、ちよつと買ってきて。あったかいコーヒー。

小島　あ、はい。

田中　（財布を覗き込み）あ。細かいの、ねえや。

女　ほんと、結構ですから。

小島　立替ときます。

田中　ああ、悪いね。

小島、去る。

女　すいません。

田中　いえいえ。近くにお住まいなんですか？

女　え？

田中　いや、見かけない顔だなと思ったから。

女　ああ……いえ。

田中　じゃ、お仕事で？

女 ……手紙を渡しに。

田中 手紙？

女 ええ。

田中 ……えっと、それは、どういう……？

順子、コンビニ袋を手に戻ってくる。

順子 ただいま……あ、いらっしやいませ。

女 ……どうも……。

田中 あ、風邪ひくと、あれだと思つて。

順子 え？

田中 事務所の前で雨宿りしてたから。

順子 ああ。お茶、入れましょうか？

田中 いい、いい。今、小島君がコーヒー買いに行ってるから。

順子 そうですか。あ、田中さん、これ。(と、コンビニ袋を)

田中 (受け取り) ありがとう。……え？ ペヤングって言ったじゃん！

順子 売り切れでした。

田中 うそお。俺、もう、すっかりペヤングモードだったのに……。

田中、カップ麺を持って去る。

順子 寒くありません？ 暖房強くしましょうか？

女 いえ、大丈夫です。ありがとう。

順子 急に、でしたもんね。

女 え？

順子 雨。朝は、あんなに晴れてたのに。

女 ああ……ええ。……すいません。ゴミ箱、あります？

順子 え？ ああ、そこ……。(と、部屋の隅を指し示す)

女、鞆から手紙を取り出す。

それを細かく破いて、ゴミ箱に捨てる。

……？

持ち帰りたくなかったの。

はあ……。

恨み言がびっしり書き連ねてあるから。

え？

最後にこの手紙を渡して、それで全部終わりにしようと思っただけで、その軒先に立って、通りすぎる傘を眺めてたら、なんだかバカバカしくなっちゃった。

順子 どういうことですか？

女 みんな、素知らぬ顔で、ちゃんと傘を持ってるんだもの。あたし一人が、無防備で、お天気に浮かれていたの。

順子 ……。

女 何につけ、見通しが甘いんだな、あたし。

順子 恋人、ですか？ その手紙の相手。

女 ……奥さん、いるから。

順子 そうですか……。

小島、缶コーヒーを手に戻ってくる。

小島 あ、順子ちゃん、おかえり。

順子 あ、ただいま……。

小島 (女に) あ、これ。(と、缶コーヒーを)

女 (受け取り) すいません。

小島 田中さんは？

順子 あつちで、お昼。

小島 そう。

順子 小島君も、お昼にしちやいなよ。

小島 順子ちゃんは？

順子 あたしはいつも電話番しながら。

小島 そうなんだ。じゃあ。

順子 うん。

小島、去る。

順子 ……あたしも、今、好きな人がいるんです。でもその人には彼女がいて……

女 たぶん、あたしの知ってる人なんです。大学の、同じゼミの……。

順子 そうなの……。

女 電話の声でピンときて……。最近、彼女のアパートで一緒に暮らし始めたみたいなんです。

順子 ……。

女 あたし、どうするべきなんだろう？

順子 ……。

電話が鳴る。

女 電話よ？

順子 え？ ああ……。(出て) はい。平井興業です。……あ、どうも。いえいえ、

こちらこそお世話になってます。……はい、ちよっとお待ち下さい。……田

中さん。田中さん。

田中、割り箸を手に現れる。

何？

お電話です。

誰？

奥様。

えっ！？ 俺に？

当たり前じゃないですか。

何の用？

知りませんよ。

順子ちゃん、余計なこと、言ってるよ？

余計なことって？

スナックの……。

電話、聞こえてますよ？

！……（電話に出て）もしもし。おう。……何でもねえよ。おまえこそ何

だよ？ わざわざ会社に……。え？ ……ああ、そう。……うん、わかった。

今日はまっすぐ帰る。うん。じゃあ。

田中、電話を切る。深くため息。

順子 どうかしました？

田中 いや……。俺、パパになるみたい。

順子 え？

田中 参ったな……。

順子 何も参ることないじゃないですか。

田中 いや、だって、急にそんなこと言われても、心の準備というものがさあ……。

女、立ち上がる。

女 あたし、そろそろ……。

田中 え？ や、でも、まだ雨……。

女 ずいぶん小降りになりましたから。

順子 あ、余ってる傘、ありますよ。ちょっと待っててください。

順子、去る。

女 あ。これ……。と、缶コーヒーを（ごめんさい。せつかく買ってきて頂いたのに。

田中 あ、いえ。

女 駅はどっちだったかしら？  
田中 駅なら、この通りをまっすぐ行って三つ目の信号を左です。  
女 ありがとうございます。

順子、傘を手に戻ってくる。

順子 こんなんしかなかったんですけど。  
田中 ああ。いいでしょ？  
女 ええ。すいません。じゃ、お借りします。  
田中 いいですよ。こんなの。わざわざ返しに来なくて。

小島、現れる。

小島 田中さん。お湯、捨てなくていいんですか？  
田中 ん？  
小島 麺、伸びちゃいますよ？  
田中 ああ。  
女 じゃあ、あたし……。  
小島 あ、お帰りですか？  
女 ええ。(田中に) 奥様に、おめでとうってお伝えください。  
田中 ああ、どうも。  
女 お世話様でした。

女、去る。

小島 何です？ おめでとうって。  
順子 パパになるのよ。田中さん。  
小島 え！ マジですか?!  
田中 マジだよ。  
小島 おめでとうございます！  
田中 めでたいのかなあ？  
小島 何言ってるんですか。めでたいに決まってるじゃないですか。  
田中 そうだよなあ。  
小島 今夜、どっかで祝杯あげますか？ おごりますよ。  
田中 マジで？  
小島 いや。この際だから、いっそ酒、やめた方がいいのかな。  
田中 ……それじゃあ、人生の楽しみなくなっちゃうじゃんか。  
順子 田中さん。  
田中 何？  
順子 お湯、いいんですか？

田中 ……あ！

田中、去る。

小島 そっかあ。田中さんもパ。パ。かあ。

順子 ……ねえ、小島君。

小島 何？

順子 あたしも留年しちやおっかなあ？

小島 え？

順子 冗談だよ。

小島 ……。

順子 雨、続くのかな？

小島 ああ。どうかな……。

二人、窓の外を見ている。

音楽。

溶暗。

### #3 『柘榴』

◎

とある田舎町の家。  
冬。

座卓の前に妹が座っている。

妹  
兄の声  
（袖に向かい）……あたし、やろうか？  
いいから、座ってる。  
……。

やがて兄、お盆にお茶を載せて現れる。  
その額に大きな絆創膏。  
兄、座卓にお茶を置く。

ありがとう。  
ほれ。（と、一通の封書）  
何？

同窓会の案内。  
ああ。  
暖房、強すぎないか？  
ううん。

何かお茶うけ、あったかな？  
いい。それより、大丈夫？  
ん？

それ。（と、絆創膏を示す）  
ああ……。 （絆創膏に手で触れる）  
病院は？ 行ったの？  
そんな大したあれじゃないから。 転んで、ちよつとすりむいただけ。  
びつくりしたのよ。 配達中、事故に遭ったっていうから……。

誰が？  
だから、兄さんが。  
いや、誰が言ったの？ そんなこと。  
ああ。 ヒロよ。 夜中、いきなり電話してきて……。  
大袈裟なんだよ、あいつは。  
で、今日、ヒロは？ バイト？  
サークルだろ。  
サークル？

妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹



兄 くん。  
妹 何はじめたの？ あの子。  
兄 演劇だっけさ。  
妹 エンゲキ？ 演劇って……お芝居？  
兄 だろ。  
妹 白塗りしたり、そういうの？  
兄 詳しいことは知らないけど。  
妹 なんで、また、演劇？  
兄 だから俺が知るかよ。直接聞けよ。  
妹 ヒロが、ねえ……。

妹、お茶を飲む。

兄 で、お前の方は、どうだ？  
妹 何？  
兄 大学。  
妹 どうって？  
兄 だから……楽しいか？  
妹 楽しいときもあれば、楽しくないときもある。  
兄 そうか。ちゃんと卒業できそうか？  
妹 まあ、なんとかね。  
兄 じゃあ、そろそろ真面目に就職とか考えないと。  
妹 兄さん、悠長ね。  
兄 え？  
妹 夏には大方、決まってるものよ。  
兄 そうなのか？  
妹 そうよ。  
兄 どうするんだ、おまえは？  
妹 え？  
兄 就職。夏には決まってるんだらう？  
妹 あたしは、まだよ。  
兄 え？  
妹 ものごとには例外つてもんがあるの。  
兄 ……なんだそりゃ。  
妹 ただいまあ。  
兄 あ、ヒロ、帰ってきた。

弟、現れる。

弟 ただいま(ま)……あ、姉さん。帰ってたの？

あんたが大袈裟なこと言うからでしょ。  
え？

兄さん、おでこ、すりむいただけじゃない。

ああ。でも、万が一つてこともあるかと思つてさ。

何だよ、万が一つて？

いや、打ち所が打ち所だったから……。

で、どういう風の吹き回し？

ん？

演劇なんかはじめたんだつて？

ああ。

なんで？

なんでつてこともないけど……このままブラブラしてんのも、あれかなつて  
思つて……。

じゃなくて、なんでよりによつて演劇なの？ あんた昔から人前出ると、あ  
がつて話せなくなるじゃない。

だからそれを克服しようと思つてさ。就活でも不利じゃんか。面接とか。

そんな理由で？

だけじゃないけど。でも、やっぱり俺には向いてないつて、稽古してみてもよく

わかった。

そりゃそうでしょ。

だから、裏方に転向したの。

裏方つて？

書いてんの。

何を？

だから、芝居。台本。

あんたが？！

三十分くらいの短い作品なんだけどね。今度、学祭で上演すんの。

へえ……。すごいじゃない。

(照れて) んな、大袈裟なもんじゃないよ。

で、どんな？ やっぱ白塗り？

そういうんじゃないよ。郵便配達員の話。

兄さんの？

えっ！？ おまえ、やめろよ！

てわけじゃないけど、初心者には、身近なものを題材にした方が書きやすい  
つて、入門書に書いてあったから。

ふうん。

不条理劇つていうのかな。空き地で、穴を覗き込んでる男がいるのね。そこ  
へ郵便配達員が通りかかるの。地図と手紙を手を持って。

うん。

そういう話。

妹 弟 兄 弟 兄 弟 兄

で？  
何？

そんだけか？

まだ、そこまでしか書けてないんだよ。  
なんだ……。

あ、そうそう。姉さんに手紙、きてたよ。  
あたしに？

弟、去る。すぐに戻ってきて、

ほれ。(と、一通の封書)

何？

同窓会の案内。

見たの？

うん。

やめてよね！ 人の手紙、勝手に。

いいじゃん、べつに。

電話が鳴る。

兄

あ。はいはい……。

兄、去る。

妹 弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟 妹 弟

で、あれ、誰なの？  
え？

あの男の人。夜中、電話、出た人。

……。兄さんに言った？

いや。

言わないで。

言わないけど……。大学の人？

うん。

どういう？

同じクラスの人。

もしかして、一緒に暮らしてるの？

ああ……。ていうか……。

いつから？

半年くらい。今年の春から。

そっか。驚いたな。

けど、今は独りよ。

弟 妹 弟

え、どういふこと？  
ゆうべ、出てった。  
……。

兄、戻ってくる。

(妹に) おい。電話

え？ あたしに？

うん。

誰？

ジュンコっていえばわかるからって。

ジュンコ？

大学の、ゼミの……。

ああ、順子。なんだろう？ こんなとこまで……。

妹、去る。

何が、ゆうべ出てったって？

え？ ああ、いや……。そういや、そろそろお見合いの返事、来てる頃だよな。

ん？

セツコおばちゃんからの電話、待ってんだろ？

ああ……。 (白々しく) そういえば、もうそんな時期だっけなあ？

今度こそ、上手くいくといいな。

……「今度こそ」とか言うなよ……。

だって実際、そうじゃなか。今度断られたら三度目だろ？

……四度目だよ。

セツコおばちゃんも仲人の立場、ねえじゃん。

いいんだよ、あの人は。好きでやってんだから。

妹、戻ってくる。

弟 妹 弟 妹

……。

どうかした？

ううん……。

……。

妹、座卓の前に座り、窓の外に目をやる。

妹

……そうか。柘榴の木、伐っちゃったんだね？

弟

え？

妹

それで、なんか違う気、したんだ。

兄

お隣から苦情きてさ。日陰になるって。

妹

そう。

弟

ちよつと大きくなりすぎた。

妹

おふくろは、ずっと嫌がってたけどな。庭に柘榴の木があるの。

弟

そうだった？

妹

うん。

弟

どうして？

妹

縁起が良くないって。

弟

縁起って？

妹

いや、よくは知らないけどさ。なんか、そういう言い伝えみたいなのが、あるんでしょ？（兄に）ねえ？

兄

みたいだな。

妹

そうなんだ。……子供の頃ね、父さんがあたしを抱っこして、熟した柘榴の

弟

実を穫らせようとしたことがあったの。だけど、あたし、恐くて恐くて……。

妹

恐いつて？

弟

裂けた実の奥の、あの赤いツブツブが、血まみれの歯みたいに見えて。枝

妹

のあつちからもこつちからも、柘榴の実が襲いかかってきて、噛みちぎられるような気がしたの。

兄

……。

妹

そっか、それでおまえよく、柘榴見ちゃあ泣いてたんだ。

兄

泣いてた？

妹

うん。泣いてた。

兄

そっか。泣いてたんだ、あたし。

妹

妹、再び庭に目をやる。

弟

知らない間にいろんなことがちよつとずつ変わっていくなあ……。

妹

再び電話が鳴る。

弟

あ。今度こそセツコおばちゃんじゃね？

妹

……んんっ。（と、咳払い）

兄

兄、去る。

弟

セツコおばちゃんが、何？

妹

お見合いの返事。

弟

お見合いの返事。

妹

お見合いの返事。

弟

お見合いの返事。

妹

お見合いの返事。

弟

お見合いの返事。

妹

お見合いの返事。

弟

お見合いの返事。

弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹 弟妹

え、兄さん、またお見合いしたの？  
まわりが世話焼かないと、出会いがないから。いい年して切手ばっか集めてんだもん。

そう。  
電話、何だったの？

え？ ああ……。ゼミの友達。

それは聞いたけど。

……。あの人が、転がり込んできたんだって。

あの人？

ゆうべ、出ってた人。

……。

バイト先が一緒なのよ。順子と、あの人。小さな建築事務所で働いてんの。  
で？

相談されちゃった。「どうしたらいい？」って。

それで姉さん、なんて答えたの？

あたしには、もう関係ないことだから、って……。

……そう。

……。ヒロはどうなの？

え？

ほら、あの娘。バイト先の……。ユカちゃんていったっけ？

ああ……。

元気？

さあ。

え、別れちゃったの？

別れたっていうか、自然とね……。お互い、環境変わると、難しいよ。

そう……。

てか、俺の話はどうでもいいの！

兄、戻ってくる。

どうだった？

ん？

電話。セッコおばちゃん？

ああ。

で？

で、って、何が？

何がじゃねーよ。見合いの結果に決まってるだろ。

……。断られた。

……。やっぱりな。

「やっぱり」とか言うなよ。

兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟

四連敗かあ。すっかり負け癖ついてきたな。  
……。おまえ、時間、いいのか？

ん？

バイト。

ああ。……。姉さん、まだ、しばらくいるんでしょ？

そうね。

どっか、外で飯でも食おうよ。兄貴のおごりで。

え？

作戦会議。三人で。

作戦会議？

次こそ、兄貴のお見合い、成功させないと。

……。

(妹に) バイト終わったら電話するから。

うん。わかった。

弟、去る。

妹 大丈夫だよ。次はきつとうまくいくって。だって、柘榴の木、伐ったんだから。

……。お茶、いれ直すか？

あたし、やるわよ。

いいから。座ってる。

兄、湯飲み茶碗を持って去る。

妹、〈同窓会のお知らせ〉の封筒から、返信用のハガキを取り出す。

妹 ……。

しばらく眺め、鞆からボールペンを取り出す。

〈出欠〉のハガキに記入する。

妹 ……兄さん。

兄の声 あ？

妹 切手、ない？

兄、戻ってくる。

兄 何？

妹 切手。

兄 切手？

妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹 兄 妹

50円の。これ、同窓会の出欠ハガキ出すの。  
切手なら、そのコンビニで売ってるよ。

兄さん、いっぱい持ってるでしょ？

そりゃ、持ってるには、持ってるけど……。

一枚、ちょうだい。

だめだよ。

どうして？

普通の切手じゃないんだよ。

いいじゃない、一枚くらい。

おまえ、簡単に言うけどな……。

ケチな男が一番、女に嫌われるんだよ。

……。

早く。

しょうがねえなあ……。

兄、去る。

妹、ハガキを高く掲げ、眺める。

音楽。

妹

……。

溶暗。



正誤表

P 12、順子の台詞7行目。【誤】「(電話に)小島さんお戻りになりましたけど」↓【正】「田中さんお戻りになりましたけど」